

大学を拠点とした子育て支援の継続性・安定性をはかる取り組み

——大学と地域との連携促進モデル事業の活動報告2——

岡田 由香¹, 高橋 弘子⁴, 佐久間清美², 金尾 洋治³, 神谷 摂子¹, 緒方 京¹,
志村千鶴子¹, 大林 陽子¹

Second Activity Report on Promotion of Cooperative Infant Parenting Support Between College and Community

Yuka Okada¹, Hiroko Takahashi⁴, Kiyomi Sakuma², Yoji Kanao³, Setsuko Kamiya¹, Miyako Ogata¹,
Chizuko Simura¹, Yoko Obayashi¹

この事業は平成20年度愛知県立大学法人理事長特別研究費の交付を受け、昨年度に引き続き行ったものである。事業の目標は①昨年度事業で整備されつつある地域に開放した大学環境、人的ネットワークなどの資源をさらに活用、また広げて事業の充実化をはかる。②大学と地域との連携による育児支援ネットワークの確立をめざす。③事業を利用して親たちとの連携を強め、親たちが自ら子育てしやすい町づくりの推進力となりうるように、親たちのエンパワメント促進をはかる。の3点である。

事業は未就園児とその養護者を対象に子育て支援ひろばとして本学の体育館を地域に開放し（名称「子育てひろばもりっこやまっこ」）、学生や教職員、保育士・地域の保健師・子育て支援関係者との連携をはかり、活動実績の蓄積を図った。実際の活動は年間50回実施し、参加した親子の1回あたりの平均は110人と昨年より約3倍増え、この事業の需要が高いことが示唆された。

キーワード：子育て支援、連携ネットワーク、大学の地域開放、大学の地域貢献

はじめに

平成19年度愛知県立大学法人理事長特別研究費を受けて行った事業（「大学を拠点とした子育て支援による大学と地域との連携促進モデル事業」）をとおして、守山区志段味地域の子育て支援のニーズが高いことを確認し、本学を拠点とした育児支援サービスを実施する必要性が高いことがわかった¹⁾。そこで、引き続き平成20年度愛知県立大学法人理事長特別研究費の交付を受け、活動実績の蓄積を図ってきたのでここに報告する。なお、平成19年度事業の詳細は愛知県立看護大学紀要第14巻¹⁾を参考にされたい。

方 法

この事業の目標は、以下の3点である

- 1) 平成19年度の事業で整備されつつある地域に開放した大学環境、人的ネットワークなどの資源をさらに活用、また広げて「継続性」「安定性」をキーワードに事業の充実化をはかる。
- 2) 大学と地域との連携による育児支援ネットワークの確立をめざし、連携システムの構築をはかる。
- 3) 事業を利用している親たちとの連携を強め、親たちが自ら子育てしやすい町づくりの推進力となりうるように、親たちのエンパワメント促進をはかる。

この事業の活動方針は平成19年度と同様に、育児中の親または養護者が気軽に誰かと交流できる機会、相談相

¹⁾愛知県立大学看護学部（母性看護学・助産学）、²⁾愛知県立大学看護学部（地域看護学）、³⁾愛知県立大学看護学部（生涯スポーツ）、⁴⁾前愛知県立大学看護学部（母性看護学・助産学）

手がない等の共通の悩みを持つ親同士が集まって交流を図り、教員や学生、保育士等それぞれがその親子をサポートすることで、それぞれの世代間交流が生まれ、本大学を拠点とした志段味地域での育児支援ネットワークが形成されていくことを考えている。

事業は未就園児とその養護者を対象に子育て支援ひろばとして本学の体育館（広さ約900平方メートル）を地域に開放し（名称「子育てひろば もりっこやまっこ」）、学生や教職員、保育士・地域の保健師・子育て支援関係者との連携をはかり、活動実績の蓄積を図った。

ひろばには遊具や絵本、木や布のおもちゃを用意し、授乳やおむつ換えのスペースを備え、居心地のよい居場所の提供をする。また、ひろばとして開放中は必ず保育士や教員等のスタッフが子育てひろば開催時間に必ず常駐し、体育館で親子が安全に遊ぶことができるよう見守り、子育ての相談等に随時応じるようにした。そして、今年度は子育てに関する最新情報やトピックス、他の機関が開催する子育て講座等の紹介などを掲示やチラシで情報提供した。事業を始める前には、平成19年度同様に各関連機関（守山区区民福祉部民生子ども係、守山保健所、守山区社会福祉協議会、守山区志段味地域主任児童委員等）に対し、ひろば開催案内のチラシ配布の依頼をし、広報活動の協力を得た。

結果および考察

1) 活動概要（表1）

- (1) 期間：平成20年5月～7月および10月～平成21年2月まで週1日午前・午後各2時間ずつ、8ヶ月間で延べ25日間通算50回開催した。
- (2) 内容：今年度は、自由ひろば46回・育児講座2回・親子サロン2回実施した。育児講座と親子サロンは講師を8人（学外6人、学内教員1人、ひろばスタッフ保育士1人）依頼した。また、もりっこやまっこに参加している母親がボランティアとしてミニコンサートと手遊び会を自由ひろばの中で開催した。学外講師は女性鍼灸師や助産師でエアロビクスインストラクター、音楽療法士などであった。いずれも参加者は1回あたり50人以上と多く好評で、参加者から開催回数の増加や、開催する時間帯を終日行ってほしい等の要望が多く出ている。
- (3) 参加者：延べ5532人（養護者2617人、子ども2915人）で昨年度〔34回開催で延べ1192人（養護者556人、子ども636人）〕と比べ増えている。また、参加した養護者は母親だけでなく父親や祖父母の参加もみられた。1回あたりの平均参加数でみると昨年度は35人であったが、今年度は110人と約3倍増えている。参加者について表には示していない特徴をあげると、1回あたりの参加数が多かった月は11月（154人）・10月（146人）・

表1 平成20年度「子育てひろば もりっこやまっこ」月別活動実績

	活動回数	参加延べ人数	参加組数	養護者(人)	参加した子ども(人)					参加者居住地				来所手段		
					総数	子どもの年齢内訳					守山区内	近隣※	県内	県外	徒歩	車
						0歳	1歳	2歳	3歳	4歳						
5月	4回	324	150	150	174	38	101	31	4	0	133	16	7	0	9	141
6月	8回	814	389	389	425	101	227	94	3	0	325	49	14	1	8	381
7月	8回	1002	465	465	537	131	250	136	12	8	359	92	13	1	10	455
10月	8回	1170	558	558	612	99	365	122	24	2	417	116	31	0	9	549
11月	4回	615	292	292	323	58	175	81	9	0	209	66	17	0	7	285
12月	4回	437	206	206	231	36	129	55	11	0	156	45	5	0	4	202
1月	6回	510	243	247	263	37	160	47	19	0	182	47	14	0	5	238
2月	8回	660	305	310	350	61	167	97	24	1	215	77	13	0	2	303
合計	50回	5532	2608	2617	2915	561	1574	663	106	11	1996	508	114	2	54	2554
%						19.2%	54.0%	22.7%	3.6%	0.4%	76.2%	19.4%	4.4%	0.1%	2.1%	97.9%
1回当たりの平均		110.64	52.2	52.3	58.3											

※「近隣」とは春日井市、尾張旭市、瀬戸市を示す。

7月(125人)の順で、午前・午後それぞれの平均は156.2人・65.1人と、午前中の参加者が多く昨年度と同様の傾向であった。また、最大参加者数は127組述べ269人であった。

これらのことからこの地域の子育て支援サービスの需要が高いことが示唆された。しかし、参加者が多くなることで、ひろば開催中の親子の安全を見守ることの限界や駐車場の確保など問題が生じるため、参加者が多い場合の対応やスタッフの充実が今後の検討課題でもある。

参加した子どもの年齢は1歳代が54.0%と半数で、次いで2歳代、0歳代の順で昨年度と同様の傾向で、この地域では特に低年齢の乳幼児を抱える親に子育て支援サービスの需要が高いことがあらためて確認できた。

参加者の居住地は守山区が最も多く(76.2%)、近隣地域からの参加も2割あった。来所手段は98%が車で昨年度と同様の結果で、本学は公共交通機関が少ないため、幼い子どもを連れての参加には手軽さ、便利さが重要で、大学が有している駐車場を活用できることが参加者増加の大きな要因であることもわかった。

(4) 事業スタッフ：事業のために依頼した保育士2名と看護師1名および大学教員2名が主に固定したメンバーとして関わった。活動運営に携わったスタッフは、保育士、本学の教員とも延べ200人以上の実動であったが、育児ボランティアの参加は10人前後で少なかった。学生は忙しい授業の合間をぬって参加していたが、今後はボランティアの参加を促す方法を検討する必要がある。大学のもつ資源を地域の子育て支援に活用することは、学生の教育効果を高める機会としても有用と考える²⁾。学生には看護学実習で参加を促し、将来親となる学生への生きた教育現場の提供をはかっていく必要がある。

2) 本事業の評価

今回の事業に参加した養護者へ無記名自記式質問紙調査を昨年度と同様に行い、この事業の評価と今後の課題を明らかにした。

調査の対象は、平成21年2月に「子育てひろば もりっこやまっこ」に参加した養護者とした。倫理的配慮として、回答は自由意志であること、回答しない場合であっても、一切の不利益を受けることはないことなどを文書にて説明し、回収箱への投函をもって同意とした。養護者142人に配布し、有効回答が得られた138人(97.2%)を分析対象とした。

子育てひろばの利用回数(図1)について、「5回以上」が60%以上で、その内「20回以上」が約10%とリピーターが多いことがわかる。また利用頻度(図2)は、「ほぼ毎週」と「1ヶ月に2回程度」をあわせると約76%と、このひろばを定期的に利用していることがわかった。

このひろば以外に子育てひろばを利用している親子(図3)は76%と多く、2~3箇所の子育てひろばを活用していた。

このひろばを利用したきっかけ(図4)は「友達の紹介」が70%以上で、昨年度と同様口コミで広がっている。広報活動は昨年度と同様、チラシ配布のみという限られた条件にもかかわらず、ひろばでは実際に母親同士でメールアドレスの交換をしたり、インターネットの情報交換サイトから広場を知って参加した親子が多く見受けられ、子育てひろばの情報について常にアンテナをはって子育てをしている母親の姿が浮かび上がってきた。こ

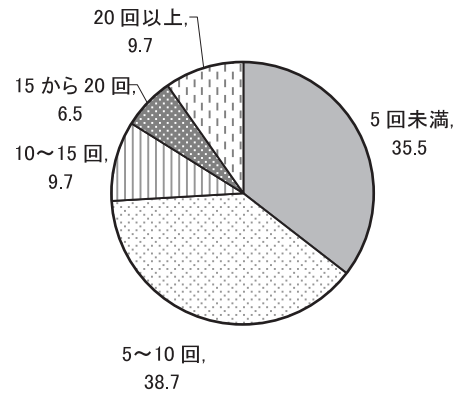


図1 もりっこやまっこ 利用回数(%)
n=138

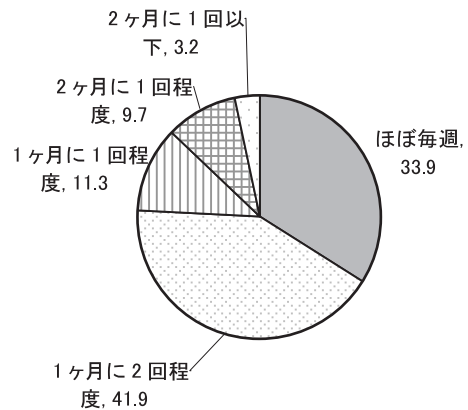


図2 もりっこやまっこ 利用頻度(%)
n=138

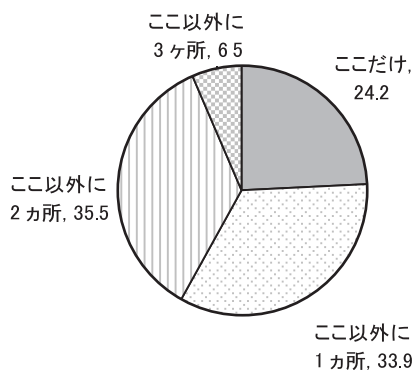


図3 他に利用している育児ひろば (%) n=138

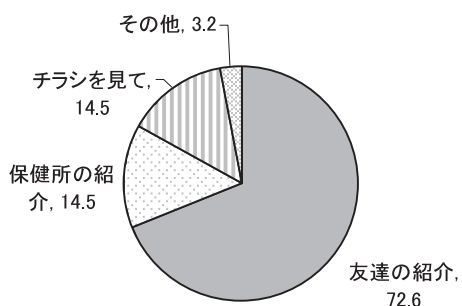


図4 もりっこやまっこを利用したきっかけ (%) 複数回答

のことは、チラシの配布を各関係機関に依頼しているが、チラシがなくなると問い合わせの電話やメールが関係機関や大学へ多く寄せられることも関係している。

このひろばの満足度は、表には示していないが「大変満足」53.2%、「ほぼ満足」41.9%と90%以上が満足しており、「やや不満」「満足していない」と答えたのは1人もみられず、今回の子育てひろばを利用した養護者の需要と供給が一致していたことが伺われた。

本学の体育館を地域に開放したことについて、表には示していないが「たいへん良い」93.5%、「まあまあ良い」6.5%と100%で、大学の地域への開放が高く評価されていることがわかった。実際にこのひろばを利用されている数名の母親からも、「大学の近くを車で通ると子どもが大学へ行きたがったり、大学を指差す」「大学と言うだけで、子どもの機嫌が良くなる」等うれしい声も寄せられている。このように地域とのつながりが強くなり、開かれた大学となり、地域貢献を担う役割を果たすことは今後も重要であろう。

ひろばでの「スタッフの構成や関わり方」「助産師・看

護師の関わり方」「保育士の関わり方」「学生ボランティアが関わること」「地域住民が育児ボランティアとして関わること」を尋ねた(表2)が、全ての項目において80%以上が「たいへん良い」「まあまあ良い」と答え、おおむね運営スタッフの関わり方について良い評価が得られた。しかし、地域住民がボランティアに関わることについては「どちらともいえない」が約1割程度みられるので、この点については今後課題として、養護者のニーズを探っていく必要がある。

ひろばに参加した理由(表3)で、最も多かった理由は「広い遊び場所」が80%以上で、次いで「安全な遊び場所」「子ども同士の出会い」「子どもと外出できるきっかけ」「屋内の遊び場所」の順でみられ、昨年度の結果とほぼ同じであった。昨年度との違いは「保育士・保健師・助産師との出会い」が去年は50%以上あったのに対し、今年度は24%と低く、今後、専門職者との出会いの機会を増やすことが課題である。今までは保育士や教員等がひろば開催時に必ず常駐し、親子が安全に遊ぶことができるよう見守り、子育ての相談等に随時応じるようにしていたが、専門職者の存在をよりアピールし、資源を活用してもらうため定期的な育児相談を行う機会を作っていく必要がある。

ひろばに参加してよかったこと(表4)で、最も多かった内容は「広い遊び場所」が約80%、次いで「屋内の遊び場所」「安全な遊び場所」「子どもと外出できるきっかけ」の順でみられ、昨年度の結果と同じであった。

ひろばに参加した理由や参加してよかったことの上位の内容で共通していたのは、「広い遊び場所」「屋内の遊び場所」「安全な遊び場所」「子どもと外出できるきっかけ」の4項目があがった。このことは、この地域における未就園児を抱える親の子育て支援サービスを考える上での重要な要素となることが示唆された。

参加した養護者からの自由意見(表5)により、「母親として子どもの目線でみて、いろいろ発見があり、育児が楽しいと思えるようになってきた。」「母親自身、心に余裕ができ、子どもと外出するきっかけができ、家にひきこもらなくなった。」「子どもの成長を客観的に感じることができ、夫との会話が増えた。」「子ども自身人見知りがなくなり、おもちゃの譲り合いができるようになった。」とあり、この事業によって子ども自身の変化だけでなく、母親自身の変化や父親も含めた家族の変化などが生じ、子育て中の家族に対する子育て力を強める支援になっていることが確認された。その他、広い場所・遊具・

表2 もりっこやまっこに関わる運営スタッフについて (%) n=138

	たいへん 良い	まあまあ 良い	どちらとも いえない	良くない	計
スタッフの構成や関わり方	56.5	40.3	3.2	0	100
助産師・看護師の関わり方	48.5	45.3	3.2	0	100
保育士の関わり方	50.7	44.5	4.8	0	100
学生ボランティアが関わること	62.9	30.6	6.5	0	100
地域住民がボランティアに関わること	55.8	32.9	11.3	0	100

表3 もりっこやまっこを利用した理由 (%) (複数回答) n=138

広い遊び場所	82.3
安全な遊び場所	58.1
子ども同士の出会い	58.1
子どもと外出できるきっかけ	58.1
屋内の遊び場所	51.6
同じ年齢の子どもとのふれあい	50.0
育児友達との出会い	40.3
育児友達との情報交換	33.9
保育士や保健師・助産師などとの出会い	24.2
自分の子どもとのふれあい	22.6
育児についての勉強	4.8
保育士・保健師・助産師への相談	4.8
育児不安や心配事の共有	1.6
その他	1.6

表4 もりっこやまっこに参加してよかったこと (%) (複数回答) n=138

広い遊び場所	79.0
屋内の遊び場所	61.3
安全な遊び場所	58.1
子どもと外出できるきっかけ	54.8
同じ年齢の子どもとのふれあい	48.4
遊具の充実	45.2
子ども同士の出会い	41.9
育児友達との出会い	38.7
育児友達との情報交換	29.0
保育士や保健師・助産師などとの出会い	25.8
自分の子どもとのふれあい	24.2
保育士・保健師・助産師への相談	17.7
育児不安や心配事の共有	6.5
育児についての勉強	4.8
ひろばに関わるスタッフのかかわり	4.8
その他	1.6

表5 もりっこやまっこに参加した親からの自由意見

- ・母親として子どもの目線でみているいろいろ発見があり、育児が楽しいと思うようになってきた。
- ・母親自身心に余裕ができ、子どもと外出するきっかけができ、家にひきこもらなくなった。
- ・子どもの成長を客観的に感じることができ、夫との会話が増えた。
- ・子ども自身人見知りがなくなり、おもちゃの譲り合いができるようになった。
- ・母親としているんなお母さんへ自分から話しかけるようになり、人付き合いに慣れてきた。
- ・子どもの遊びの幅が広がり、友達といっしょにいると楽しいということが子ども自身わかるようになってきた。
- ・名古屋市内にこれだけ広い遊び場所がないため、思いっきり遊べる
- ・無料で、駐車場もあり、雨の日でも安心して遊ぶことができる。
- ・遊具がきちんと消毒してあるので衛生的で安心・安全。
- ・自宅にない遊具が充実しているため、子どもが大変喜んでいる。
- ・保育士や助産師など先生方が何人かいるので安心。
- ・育児講座で教えてもらったことを自宅に帰り夫に話し、家族にとってすごく役に立った。
- ・育児に関する資料がとても役に立った。
- ・この地域は児童館や公園などの施設・設備がないので大変助かる。
- ・育児サークルの場所貸しをしてほしい。
- ・開催曜日を増やしてほしい、ぜひこのひろばを長く続けてほしい。

専門スタッフなど安心して安全な遊び場所になっていること、育児に関する情報発信の場所になっていることも確認された。以上の活動実績から、事業の充実化をはかる目的は達成できたと考える。しかし、事業の継続性、安定性はいまだ求められているため、引き続き事業を継続し、事業の目標到達のためのさらなる展開が必要である。

自由意見のなかには「育児サークルの場所貸しをしてほしい。」という声があり、この点は今後の検討課題である。今回事業の目標の1つに『事業を利用している親たちとの連携を強め、親たちが自ら子育てしやすい町づくりの推進力となりうるように、親たちのエンパワメント促進をはかる』とあるが、この目標を達成するためにも今後は親たちの自助グループや育児サークルに対する支援を考える必要がある。

3) 守山区子育て支援ネットワーク連絡会

この事業をきっかけに、守山区子育て支援ネットワーク連絡会のメンバーとして参加することになり、区役所の担当者や保健師の他、公立・私立保育園や幼稚園の職員、主任児童委員、育児ボランティアグループ等守山区の子育て支援関係機関と人的な交流や情報交換をとるようになった。そのことで守山区の子育て支援の現状がさらによくわかり、相互の連携・協力体制をはかることの重要性を痛感した。また、本学が所在する地域の主任児童委員が開催する親子サロンに学生とともに出前講師を依頼され、地域に向かっての大学の専門的機能を生かせる機会ともなった。そして、本学の大学生とふれあうことを楽しみにしている親子がいることも目の当たりにしてきた。

これらのことから地域に開放した大学環境、人的ネットワークなどの資源はさらに広がり、大学と地域との連携による育児支援ネットワーク形成についての事業目標は達成できたと考えられる。今後はこのネットワークの確立をめざし、さらには連携システムの構築をはかり、システム全体で地域の子育て支援を包括的にみまもり、子育てしやすい地域づくりのための具体的な支援を検討していきたい。

ま と め

本事業をとおして、大学の地域開放、大学と地域との連携による育児支援ネットワークが形成され、大学における地域貢献の実績を積むことができた。

今後の課題として、学生ボランティア、育児サポーターの参加を促す。特にこの地域に住む子育て経験者である育児サポーターとの連携をはかり、事業を利用する養護者が自ら連携システムに加わり、子育てしやすい町づくりの推進力となりうるためのエンパワメント促進をはかる。また学生には実習で参加を促し、子育ての生きた教育現場を提供していくことが課題である。

おわりに

この事業は平成20年度 理事長特別研究費の交付を受けて行ったものである。教育業務の傍らに事業に携わるため制約や限界があり、十分ではなかったが、活動スタッフに助けられ支えられて2年間この事業を継続することができた。何よりも固定した保育士スタッフがこの事業を何よりも理解し、支えてくれていることが大きな力となっている。連携の重みを感じながら、このひろばを楽しみにしてくれている親子のためにも、この活動の継続に今後も取り組んでいきたい。

この事業に携わってくださった保育士・看護師、本学の教員と職員、外部講師の皆様には深謝いたします。

参考文献

- 1) 岡田由香, 高橋弘子, 佐久間清美, 金尾洋治, 山口江利子, 神谷摂子, 緒方京, 志村千鶴子, 大林陽子: 大学を拠点とした子育て支援の取り組み—大学と地域との連携促進モデル事業の活動報告—。愛知県立看護大学紀要。第14巻: 113-120, 2008.
- 2) 高橋弘子, 岡田由香, 恵美須文枝: 看護学生のボランティア志向性に関する実態について—育児支援ボランティアを中心に—。第20回日本助産学会学術集会, 2006.